
私の人生 勇者サマ？

大神 林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の人生 勇者サマ？

【Nコード】

N1028V

【作者名】

大神 林檎

【あらすじ】

「勇者様！」

「うるさい！私は忙しいの！」

「そんな、勇者様しかいないんです！」

「だから、私は勇者になつた覚えも記憶もございません！」

ある日、若い男と出会った。そして何故か勇者にされた。いやいやいや、何でそうなるの？私の人生は私だけのもの。夢だつてあるんだから誰にも邪魔なんてさせない。でも魔王を倒さないと未来が…つて、本当にムカつく！面倒事押し付けてくれちゃって！私は私の

人生を真つ当に生きるため、その魔王を視察しに…え？倒さなきや駄目って？もうやだ、勉強させて…。

「勇者様、早く行かないと魔物が…」

「黙って。今勉強中だから」

「ベンキヨウなんかより、早くしませんと街に被害が…ゆ、勇者様、苦し、い…！」

「黙ってね」とこのまま締め落としてその首落とすぞ」

第一話「勇者サマが見つかった」(前書き)

二作目です。とりあえずごめんなさい。

そして今回は初っ端から視点がころころ変わります。

次回からはこんな忙しいことはしないです。

えっと…読んでくれると嬉しいな？

第一話「勇者サマが見つかった」

「んー… やつと終わった」

私は終わったばかりの授業の黒板を見ながら軽く伸びをした。今日はこのあと予定もないし、カフェに寄って少し勉強してから帰ろうかな。

そう考えながら、私は荷物を鞆に詰め、大学をあとにした。

今日は何を食べようかな。モンブランとストリートにしようかな。

そんなことを考えながら人通りの多い大通りをルンルン気分で歩いていた。

あ、せっかくだから友達も一緒に呼んだほうがいいかな？もしかしたら課題も手伝ってくれるかもしれないし。報酬はそのカフェの奢りで。

私は携帯片手に気分が上がっていた。

そして私はこのあと後悔することになる。どうして真っ直ぐ帰らなかったのかと。

こんな厄介事を背負う羽目になった自分の人生を…。

くそっ、やはりこの世界にも溢れていましたか…。

裏路地から出ている茶色いもやもやしたものを見つけ、僕は腕に嵌めている石に向かって現状を報告する。あれは僕らにしか見えないものだ。

「団長、ここにもやつらの思念が多少なりとも溢れています。このままではこの世界の住人に見つかるのも時間の問題かと…」

少しして、石の中から少し渋い大人の男の声が聞こえてきた。

『一刻も早く見つけ出せ。手段も遠慮もいらん、時間だけが勝負だ』

「了解しました。引き続き搜索します」

僕は石から視線を逸らし、ここにいるというあのお方を探し出すために歩き出した。

それにしても、ここはとても歩きづらい世界ですね。こんなにも住人がひしめき合っているのにも関わらず、まるでそれに頓着しないこれが慣れというものでしょうか。

そんなことを思いながら歩いていると、前からとても綺麗な女性が見えた。本当に、美しいとしか言い表せない女性です。この世界の国の住人に珍しく、金色の髪と瞳を持っていますね。それらも合わせ、この女性の美しさに僕は一時見惚れていました。

その時、どこからか漂う妖気を察知しましたがこの女性に見惚れていたため一瞬出遅れてしまいました。

それは一瞬の出来事でした。その妖気の塊はこの世界の住人の子供くらいの姿を形成し、一直線にその美しい女性へと襲い掛かります。まずい、間に合わない…！そう思った時です。

襲われた女性はこの世界の住人にも関わらず、体を少し反らすだけでその妖気の塊から避けました。それだけでも僕は啞然としてしまいい動けませんでしたが、美しい女性はそれだけに留まらず、避けざまにその妖気の塊の腕を掴み地面に叩きつけました。

「……………」

いくら妖気の塊とはいえ見える者には子供の姿、とても痛々しく直視できませんでした…。女性は叩きつけた妖気の塊を今度は容赦なく、そして休みなく踏み続け終いには粉々にして、最後は豪快に蹴り飛ばし、その風圧で消し飛ばしました。妖気の塊には反撃の隙どころか逃げ出すことさえ許しませんでした。

…なんでしょう、この感覚は。美しい女性の犯行はあまり見たくありませんでした。

そんなことより、あの妖気の塊が見えること、そして何よりあの妖気の塊に触れることが出来るのはあのお方しかいない…！僕は急いで美しい女性の元へ行き、その神々しさまで感じられる美しさの前に跪きました。

「やっと…やっとお会いできました。勇者様！」

大通りを歩いてしばらくすると、なにやら悪寒がした。なんだろう、この感覚は。

辺りを見回しても何も異変はない。どころか、とても平和そのものに見える。

「気のせいかな」

そう思うことにして一歩踏み出た途端、悪寒が一層強まり私は思わず体を仰け反らした。その瞬間、この悪寒の正体が分かった。いや、分かりたくなかった。

「ひつ…!？」

こいつの正体、蜘蛛…らしき虫だ。大きさは人間の子供より小さいくらい。黒くてモヤツとして毛むくじやらだけど虫にしては結構大きい。そして気持ち悪い…でも足が六本もあるのは虫でしょ。人間じゃないでしょ。本当は着ぐるみで中には可愛い子供が入っていると聞いたかったけれど、この悪寒はどうにも覆せない。どうしても嫌悪感が溢れ出てしまう。

蜘蛛は駄目だ。蜘蛛だけは…どうしても見逃せない。

私は目を瞑りとっさに手を伸ばしその蜘蛛の腕を掴む。毛むくじやらの感触が直に私の手の中でモゾリと動く。ぞわぞわっと鳥肌が立ち、もう本能的にその蜘蛛を地面に叩きつけた。なんかいい音したけどそんなことに構う余裕なく、間を置かずその蜘蛛を踏み潰す。何度も何度も…思いつきり。何回踏んだが分からないが、なんか粉々になったところでそれを蹴り上げ風圧で証拠隠滅をした。

「ぶつ…」

やっとこの視界から蜘蛛が消えた。なんだか満足感いっぱいになっていると、どことなく周りの空気が変なことに気づいた。はっとして見渡してみると、私は輪の中心人物になっていた。ようは、周囲の人から何故かとても引かれ、イタい子を見る目で見つめられていた。

…え?なんで?もしかして今の蜘蛛、私にしか見えないし触れないってこと?もしそうならこの周囲の冷たい視線も納得出来る。なんとなくって見た目外人の私がいきなり暴れだしたんだもんね…。恥ずかしいから早くカフェに行こう、そうしよう。

私はそそくさとその場を立ち去ろうとしたとき、何故か前から一直線に歩いてくる若い男がいた。もしかして、今の見て精神病院に連

れて行かれる?!それが長々とお説教される?!今から勉強したいのに、そんなのは絶対いや!

しかし、そんなことを考えているうちにその若い男は私の前まで来てしまった。とりあえず話を聞いて、話を通じなさそうなら蹴っ飛ばしてでも逃げよう。そう構えて、若い男の話を聞こうとした。したんだけど…いきなり方膝を地面につけて、王子様お姫様にするよ
うな格好で見上げられた。私は啞然として動けなかった。そしてその若い男が口を開く。

「やっと…やっとお会いできました。勇者様!」

……………は?それは誰に言ってるんですか?

第一話「勇者サマが見つかった」(後書き)

とりあえず、主人公は踏んではいけないものを踏んでしまいました。それはきつと導線に火をつけるスイッチでしょうね…。
まずは、巻き込まれてください。
この子達がちゃんと動いてくれるといいな…。

第二話「勇者サマは覚えてない」

なんだか綺麗な青い瞳に見つめられ、そしてその綺麗な声で紡ぎだされた言葉を私は現実として捉えることは不可能だった。つい、無駄だとは分かってはいても周りを拳動不審気味に見渡すが、綺麗な青い瞳は相変わらず私に向かって一直線だ。…いや、嬉しくないんですが。

「…えっと、誰ですか？」

やっと出せた声は低く掠れかけていた。いや、むしろ出せたことを褒めてください。この不審者を蹴り飛ばさなかっただけでも寛大な心だと褒めてください。

私の言葉に、今度は若い男がえ？って顔をした。…何これ、ドツキリ？私今そんなに変なこと聞いた？

「どこかで会いましたっけ？でもこんな人、いたら忘れられないけど…」

個性的なキャラという意味で。だって、会って開口一番に勇者様って…これを個性と言わないならただの頭の狂った変人だ。もしくは深刻的な電波さんか。

若い男は立ち上がり、さらに私に近づいてくる。ち、近い…！そうは思ったものの、まじまじと見ずにはいられなかった。容姿年齢は18、19歳といったところ。綺麗に手入れされたのだろう黒髪が摩くたびに青い瞳が私を捉える。顔も少年から青年へと変わりつつあるような若い顔立ちだった。しかし、その服装は…なんとも言えなかった。だって！だってこの男鎧着てるんだもん！騎士のような頑丈な鎧を黒く染め、さらには紺色のマントをたなびかせる。

「お忘れになりましたか？勇者様」

やっぱり、いい声だ。大人の渋みのある声ではなく、果てない優しさのそこから吹いてくる風のようにとても穏やかな声。正直言つと、とても好みです。

…じゃなくて！お忘れに？いや、だから忘れるもなにも会った覚えがない。こんな格好いい男ならなおさらだ。

「人違いでは？私はあなたを知りません」

とりあえずそう告げて、相手の反応を伺う。すると若い男は右腕を自分の顔のほうに向けて喋り始めた。いや、腕にではない。正しくは腕に直接嵌め込まれているのだらう青い石に向かってだ。

「団長」

一言、若い男が呼びかけると石から年齢を重ねた渋みのある声が聞こえた。

『どうした。見つけたか？』

「それが、勇者様を見つけることは出来たのですが…」

若い男がそう言うつと一瞬私を見た。まだ私を勇者様と言い張るきか。

『それなら一度戻って来い』

「いえ、どうも様子がおかしいのです」

私から見たら君のほづが変に見えるんだけどね。

『何か問題でもあったか？』

「はい、この代の勇者様に我らの記憶が残ってないと思われま

す。この代？我ら？記憶？

変な単語がいつぱい出てきた。これから大学の勉強したいのに、こ

つちのことが気になってしょうがない。一体何がどうなってるの？

『…それは本当か？』
「おそらくは。まだ確定したわけではないのですが、僕のことを覚えていませんでしたので」

『それは厄介だな…』

だから、君たちに関わってる今のほづがすごく厄介だよ。

『一度来い。話はこれからだ』

「了解しました」

話は終了したようで、若い男はまた私の前で跪いて頭を下げながら口を開く。

「先程は馳せ参じるのが遅く、お手を煩わせてしまい申し訳ありませんでした。私の名前はラン？シャーウックと言います。どうぞ、お好きなように呼びください。出来れば、今代勇者様のお名前だけでもお聞きしたいのですが…」

そこまで言っつて顔を上げ、じつと私を見る。え？その今代勇者様つて私のこと？

「ユズキ ユキ 柚木美優です。あの、シャーウツクさん…」

「私のことはどうか、ランと呼び捨ててください」

会っつて間もない男の名前を呼び捨てにしろっつてか。でも言っつこと聞かないと面倒だし、しかたない。

「ラン君」

「ですから、呼び捨てを…」

「これは妥協案だよ。それが嫌なら犬っつて呼んであげようか？」

私は冗談のつもりで、私の案を受け入れてくれるように言った。なのに、目の前にいるラン君はその言葉を恍惚と受け入れるように目を閉じていた。

「勇者様の犬…ああ、なんて甘美な響きでしょう。勇者様のお側にいれるのみならず、犬という側近の地位まで与えてくださるとは…とても嬉しく思います」

「……………」

この鎧の男は、大変マゾチックな男でした。忠犬も真っ青なほどに歪んだ一途さだよ。重いよ、鉛のように重いよ…。まだうっつとりと犬という言葉の感触を味わっているラン君に、私は

なんと言葉をかけていいのかわからず、とりあえずとても冷えた視線を送った。

第二話「勇者サマは覚えてない」（後書き）

ヒロインと、その仲間の登場。

のはずですが…その仲間がとても残念ですね。

個人的に、こういう噛み合わせの悪い組み合わせは好きです。
勇者様とその騎士ではあり得ない関係ですが。

第三話「勇者サマは拒絶した」

私ははつと我に返って辺りを見渡した。

周囲のギャラリーはまた私のことをイタい子を見るような目で見ていた…って、ちよつと待って！今明らかに私よりおかしい人が私の目の前にいるよ！？鎧にマントだよ！？何で私ばかりそんな目で見るの！？

私は居た堪れなくなって、とりあえず会ってそうそうに判明したマゾちつくなラン君の腕を引っ張って家に帰る。大学からなら徒歩5分で着くから大して人に見られないし、私の精神的ダメージも少なくて済む。

「ここならいいか…」

家に着いてしつかり鍵を閉め、ラン君を私の部屋に通す。私はベツトに座り、床には座布団を敷いてラン君に座るように促す。

「ここはどちらですか？」

「私の家だよ。あそこにいたら目立ってしょうがないから」

ラン君は座布団の上に正座しながら私の話を聞いている。…面倒だから突っ込まないでおこう。

「まず、ラン君は何者？その服からすると、どっかの騎士？あと、その腕に嵌っている石は本物？」

矢継ぎ早に私に質問され、ラン君は少し考える素振りをして私を見つめた。

「勇者様は、本当に覚えていらっしやらないんですね？」

「覚えてるも何も、この20年間一度たりともこんな経験したことないもの」

「そうですね…」

「はあ」とため息をついて、ラン君は話し始めた。

「何かからお話すればよいか…そうですね、まずはこの世界とあちらの世界のお話をしましょう」

あちら？あの世とこの世みたいなもの？

「いえ、そのような俗世に関わるものではなく、次元や時空のことです。この世界、地球規模ではなく時空を超えた世界の存在は三つほど健在しております。まず、我々はこの人間の住む世界を<人間界>と呼んでいます。次にこの世界とは違う次元の平行世界の内の一つを<下界>と呼び、この世界には先ほどの勇者様の敵…所謂魔物が蔓延っている世界です。そして、最後には我らが勇者様のご誕生なされた<光界>という世界。この三つの世界は、互いがその領域を侵さないということで平穏を保ってきていました」

…ちょっと待って。健在ってどういうこと？他にも世界はあったということ？

「勇者様のご推察通りです。まだ他にもこのような世界はあります。しかし、幾度にも重なる内乱や戦によって滅びているのです」

ラン君はその<光界>という世界で生まれたのよね？

「はい。初代勇者様が<光界>にて産み落とされてから、その30年後くらいに私という存在が確立しました」

…え？初代勇者が産まれて30年後？私が4代目だから…ラン君今何歳？

「そうですね、この世界に換算いたしますと…ざっと300前後かと」

な、長生きだね…。それで、肝心な話。どうして私が勇者に選ばれるの？私はそんな異次元から産まれたわけでもなければそんな話は聞いたことないんだけど。

「勇者様は選ばれるものではなく、受け継がれるものです。前勇者様がお亡くなりになられた後に、その力は<光界>か<人間界>を彷徨い、次世代を担う魂へと受け継がれていくのです。しかしながら、その受け継がれるための資格や資質などは誰にも分ならず、いつ次の勇者様がご誕生されるのか分からない状況になってしまったため、二つの世界を行ったり来たりして勇者様を見つけたし、お守りするのが私たちの役目です」

私たち？ラン君の他にも同じような人がいるの？

「はい。もともと<光界>は勇者様を迎えるための世界であり、ここに住む半分の民は兵であり、勇者様のお仕えする騎士です。私は<光界>の勇者様直属の護衛騎士団副団長を勤めさせていただいております」

…駄目だ。頭がおかしくなりそう。こんな話、信じられるわけがない。質問していい？

「はい、なんでしょう」

この勇者って役目は、どんな役目なの？

「…<下界>には先ほど言ったとおり、魔物が蔓延る世界です。そして、その中でもその魔物たちを治める魔王が君臨しています。その魔王の力は強大で、一定時期になると封印から目覚め魔物たちを使って二つの世界へと侵略を謀るのです。歴代勇者様はその魔王の封印をするためにその力を授かっているのです」

魔王を封印したその勇者様のそのあとの人生は？

「……………」

ラン君？

「私も…あまり詳しくは知らないのですが、歴代の勇者様たちはそのお力を使い果たしたあとは、そのお命を…」

…待ってよ。勇者様の役目を終えたら、そのまま死んじゃうってこと？

「…………おそらくは」

「ふざけないで」

ラン君は目を伏せたまま、一気に鋭くなった私の視線に耐える。そ

れでも、私の怒りは収まらない。

「勇者様は魔王を倒したあと死んでしまいます。そんな話を聞いて、素直に役目を果たそうと思えるの？」

「しかし、そうでもしなければこの三つの世界の均衡が…」

「だからって、私に死ねっていうの？悪いけど、勇者なんて役目は御免だわ」

「?!」

ラン君は目を見開いて私を見上げた。

「その歴代の勇者様たちが何を想って何をしたのか知らないけど、私にはやらなくちゃいけないことがあるの。そんなホラ話とも捉えられないことにホイホイ賛同なんて出来ない」

私はきつぱりと、勇者なんて請け負わないと言った。ラン君の顔から驚愕や困惑の色が見えたが、そんなの関係なかった。

私の人生は私のもの、誰かに決め付けられた人生や誰かのために生きる人生なんて御免真つ平なの。私は、私の意志でこの人生を歩いていく。誰かに流されたり縛られたりすることなく、私自身がこの人生を決めるのよ。運命なんて信じない、神様なんていないの。

勇者？魔王？死ぬ？ふざけないで。他人の人生を何だと思ってるの？歴代の勇者様だって、未練を残して死んでいったに決まってる。なのに、その残酷な運命^{カルマ}をまた繰り返そうというの？たとえ殺されても、私は嫌だ。

「で、ですが、それでは魔王は…」

「ラン君たちでなんとかしなさいよ。私の居場所はこの世界だけよ」
ばっさりとラン君の言葉を切り捨てた。

そのラン君は捨てられた子犬のようにしょんぼりと肩を下ろしていたが、しかたがない。嫌なものは嫌なのだ。

私は大きく溜息を一つ零した。

「悪いけど、お引取り願える？」

第三話「勇者サマは拒絶した」(後書き)

おっと、ヒロインのせいで完結まっしぐらか？

とても私の強いヒロインですね。

そんなヒロインを、ランくんは説得できるのか？

というか、出来ないと終わっちゃうから頑張つて！

こんな完結なんてやだからね！

第四話「勇者サマは苛立った」

私はその一言だけ言ってラン君の背中を押して玄関先まで追い出した。私に強引に追い出されながらも何か言いたそうなラン君。そんな微妙な雰囲気の中、家のドアがいきなり開いた。

「あれ？姉ちゃん帰ってたんだ」

学ランの制服姿の幼い男の子が家に入ってきた。

この男の子は弟の悟^{サトル}。中学1年生で私とは7つも歳が離れてるの。

「学校は？まだ昼過ぎよ？」

ひとまずラン君を放置して悟に話しかけた。

「今日は短縮授業だって言っただろ。だから弁当も持っていかなかったじゃん」

ああ…そういえばそんなことも言ってたような。

「しっかりしてくれよ姉ちゃん。もう老」

「あ？」

「い、ごめんなさいお姉さま…」

思わず弟相手に本気で睨んでしまった。昔のクセが中々抜けなくて困る。

自分の大人気ない行為に思わず深くため息をつき嫌悪していると、

悟がラン君を指差した。

「そんなことより、さっきから気になってたんだけどこの人お客さん？」

お客さんかと聞きながら訝しげにラン君を見つめている。そしてあらゆることかともんでもないことを言い出した。

「もしかして姉ちゃんの彼氏？」

「は？」

弟の予想外な言葉に目が点になった。なおも我が弟は両腕を挙げやれやれといったポーズでその口を閉じずに話し続ける。

「今度の彼氏は重度のコスプレイヤー？姉ちゃんって昔から変な男に好かれるよね。今までだって鉄道オタクやらチャライのとかストーカーとかいなかったっけ？新しい彼氏はいいけど、今度はまともな人なの？いつも強引に付き合ってくれて頼まれて最後には折れたくせに一週間も続かないのに」

怒涛であり色々と個人情報の流れる弟の饒舌に思わず頭を抱えなくなったが、あまり話をこじらせたくなかったから完結に済ませられる選択をとった。

「大丈夫だと思うよ。そのいつもと同じような展開だし」

とりあえず嘘をついた。

この場合のいつもとは、もちろん歴代の彼氏達と付き合っつきっかけになった通例だ。色々な場所で待ち伏せされたり人が多いところで

告白してきたり…強引で自分勝手な男ばかりだ。一週間もしないうちに冷たく毒を吐いて振るけど。

今回は別に付き合ってるわけでもなければ勇者なんて役割を請け負ったつもりもない。そもそもそんな眉唾の話を全て頭から信じられるほど心が子供でも純粹でもない。ただ、昔にも何回かあいつた経験をしたことがあるから話を聞いただけで信じたわけでも信用したわけでもない。死ぬなんて話はもつてのほか。

「…やっぱり変な人なのか。鎧とマントなんて着てるし、どこかの騎士みたい」

「あの」

悟の言葉に思わず肩が軽く跳ね上がったが、どうにか少しでも抑え何かを言いかけたラン君の背中をまた押して今度こそ玄関の外まで追い出すことに成功した。

「とにかく、その話はまた今度ね」

それだけ言っただけラン君の返事も聞かずにドアを閉め、鍵をかけた。ふうっの一息ついていけると、悟が芋ランの上からエプロンを白い装着しながら話しかけてきた。

「姉ちゃん。彼氏にあんな態度でいいの？」

「いいのよ。そもそも今回だってロクな奴じゃないんだから」

「姉ちゃんって男見る目ないよね」

「何言ってるの…私が選んでるわけじゃないんだからそんなの知ら

ないわよ」

弟の酷評に納得できずに思わず反論している間に、悟はもう料理の準備を始めていた。

そつちから話振つといてこつちの話の途中で作業するって…我が弟ながら薄情者め。そんなに変なのがいやならお前も抗議の一つくらいしろつての。

私はぞんざいな扱いをする弟をしばらく恨めしく睨んでいたが悟が一向にその視線に気付くことがなかったからしかたなく溜息を吐いて私は自室に戻った。

自室に戻った私は大学の課題プリントを鞆から出しながら今日の出来事を思い返した。

鎧にマント、勇者に魔王、そして最後は　　そこまで思い至つて、私ははつと我に返つて首を軽く左右に振った。私はこのまま死ぬなんて出来ない。夢だつてあるし、悟のことだつて保護者として面倒を見なきゃいけない。父さんも母さんも今はいないのだから私が悟のそばにいないと誰があの子のそばにいてやれるのか。だから、ラン君の言うことを鵜呑みにして本当に死ぬことは出来ない。

いや、本気で信じてるわけじゃないけど。

でも、全てを否定できるほど私は無知じゃない。あの蜘蛛を…いや、あの蜘蛛と同じようなモノを私は見たことがある。あるだけじゃないか…。

「あんなの、もう見ないと思つてたのに」

アレを思い出して、憂鬱になつてついでまた大きく溜息をついてしまった。今日何度目の溜息だろうか…考えるのも嫌になる。いつそあの優男全身縛つて川に流してやるうか。それとも鮫しかない区域の海に全身血だらけにしたまま放り込んでやるうか。

…まずいまずい、あまりのイライラで思考が危ないほうへ漏れ出した。でも、面倒なことに関わったことは事実よね。これで大学の単位を一つでも落としたらどうしてくれようか。

「姉ちゃんご飯できたよー」

課題を机に広げたもののペンが進まず、ぶつぶつと溢れ出す怒りを独り言に乗せているとノックもせず勝手にドアを開け悟が顔を出してきた。

「ノックしなさいっていつも言ってるでしょ」

怒りのほんの一部を悟に八つ当たりで解消させ、私はゆっくりと椅子から立ち上がり自分でも気付くほどにほんのりと笑みを零しながら我が弟が用意した、まだ美味しいとは言えなくてもそれでも頑張って作ったと誰もが分かる私の大好きな手料理を食べるために自室を出た。

第四話「勇者サマは苛立った」(後書き)

弟くんの登場です。なんか生意気っぽい弟ですが、姉思い…だと思
います。姉も姉で弟…想いっぱいですね。

それにしてもラン君の扱いひどいですね。でもなんとか勇者様辞退
を免れたようです。

姉は姉で今回はひどく苦勞性でクロいことが分かったと思…これ以
上言つと作者でも絞め殺しそうな姉ですのでやめておきましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1028v/>

私の人生 勇者サマ？

2011年10月10日03時04分発行